

「クワワツ、クワワツ」。晩秋の朝、子供たちはマガンの鳴き声を聞きながら登校します。見上げるとラムサール条約湿地である宮城県大崎市田尻の「蕪栗沼」、古川の「化女沼」から飛び立ったマガンが何百羽もの隊列を組んで飛んでいきます。

この豊かな自然の中で子供たちがおおいに遊び、学んでいるだろうかという疑問がわき、私は三年前に「大崎自然界部」という環境保全・環境教育団体を立ち上げました。メンバーは、農業、医師、教師など。これまで七百人以上の子

## 東北復興日記

16



大崎自然界部部長  
若見朝子さん

## 自然の営みから学ぶ

供たちに湿地や田んぼなど「生きる力を育てる教育」を行ってきました

目線ではなく、鳥や虫、植物の目線、気持ちにな

て、互いを大切に、わくわくドキドキしながら五感で感じる授

自然の一部であるという精神がありました。

「写真。」「生きる力を育てる教育」とは、地域の身近な自然に対し、「ヒト」の

さ、風のさわやかさ、目

いやる気持ち、生きぬいていくための知恵がたく

さんあります。子育て中の私にとっても、新しい発見の連続です。

そして、大震災。電気・水道などライフラインが寸断されました。井戸を活用したり、自分で育てていた野菜を持ち寄り、地域の人たちとのつながりで足りないものを補い合う生活がしばらく続きました。そこには忘れかけていた助け合いの精神がありました。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

私がオーガニックコットンを日本に持ってきてからはや二十二年になりました。原綿をテキサスから輸入し、糸作りから生地、製品作りまでを国内で行うことにこだわっています。日本の市場に売っている繊維製品の90%が輸入品といわれる中、日本での物づくりは年々難しくなっています。加工所が廃業したり、倒産したり、繊維産業は衰退の一途をたっています。

ペリーが日本に上陸してから米国の安い綿が日本に入ってくることになりました。明治時代に綿の関税が撤廃されてから

## 東北復興日記

17



アバンティ  
代表取締役社長  
渡辺智恵子さん

## 繊維産業の再興目指す

は、輸入量も格段に増え、それまでは全国各地で栽培されていた原綿は作られなくなりました。代わりに織維産業が経済を支えるようになりまし

た。しかし、平成になると中国で織維産業が大きく発展しました。安い賃金とを求めました。麻も栽培されなくなりました。織維製品の原料も製品も国内では作られなくなりました。自給率は限りなくゼロです。食料の自給率が40%を切ったことが知られていません。日本では何とか少しでも自給を再開したいと、私たちは二〇〇〇年からオーガニックコットンの栽培を始めました。

福島は、風評被害で多くの農家が米や野菜を植

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

えることをやめてしまいました。一方、いわきでは綿を植えることに挑戦する人たちが現れました

写真。和綿の種を一緒に市内十五方所一・五畝にまき、十月から収穫が始まりました。これから福島をオーガニックコットンの国内最大の産地に作りもこの福島でやれるようにし、織維産業を再構築していきたいと思

東日本大震災以降の関連死が九月末現在、福島県内で千二百二十一人に上るといふ復興庁から発表された数字は衝撃でした。岩手県の三・四七倍、宮城県の一・三八倍に上るといふ福島県の状態には、問題の深刻化が端的に表れています。

また、双葉八町村から避難されてきた方のお話をうかがい、日常生活を取り戻すまでの長い道のりに驚かされることがあります。いわき市内にはまだまだ建設中の仮設住宅があります。一年九カ月を経過しようという今になっても、です。

いわき市が市内の農業

## 東北復興日記

18



「コットンベイブ」が誕生しました。写真。この種を来年日本中の皆さんと共に育て、収穫したコットンで、タオルやTシャツを作り、福島の新し

い。そして、収穫されたコットンの種でできた人形「コットンベイブ」が誕生しました。写真。この種を来年日本中の皆さんと共に育て、収穫したコットンで、タオルやTシャツを作り、福島の新し

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。



NPO法人  
ザ・ビープル代表  
吉田恵美子さん

## コットンベイブ迎えに来て

従事者に対して実施したアンケートでは、65・5%が「風評被害が深刻で、無事行つことができません」と答えています。少しでも軽減させたいと取り組み始めた綿の栽培「いわきオーガニックコットンプロジェクト」

従事者に対して実施したアンケートでは、65・5%が「風評被害が深刻で、無事行つことができません」と答えています。少しでも軽減させたいと取り組み始めた綿の栽培「いわきオーガニックコットンプロジェクト」

い仕事や仲間の輪を上げていきたいと願っています。

クリスマスギフトに使用して、いわきの農業の復興に力を貸していただけ

十一月は毎週末、市内のいづれかの栽培地です。十五日まで東京ビッグサイトで開催中のエコプロダクツ展に出展しています。コットンベイブを迎えに来てくださ

昨年三月十一日、避難先の石巻高校(宮城県石巻市)は指定避難所にもかかわらず、災害用品も食料の備蓄もありませんでした。被災者は皆、重なり合うようにうずくまり、ぼうぜん自失。そんな時でも、今この場でできることは何かと問い、見つけ出し、動きだす人がいました。その姿を見て大人も子供も呼び起こされたように動きだしました。

そこには何もかもがない。でも、それぞれが持ち合わせのものを、分け合う姿がありました。保育所にあったおやつのパウンドケーキは、一歩角で

東日本大震災  
復興NPO  
センター事務局長  
太田美智子さん



## 東北復興日記

19



### 子供が里山サバイバル

厚さ五センチに分けて四百人家族のようなミニコミが一口ずつ食べました。ユニティができていき生きるときに動きだしました。そこから生まれし、食を共にすることか、る力が自立への礎になっらスタート。避難所運営たようです。そう認識で生まれれる仕事も分け合える場面が子供にも大人い、支え合いました。そにもありました。

「ト」が今年十月、宮城県登米市東和町相川で始まりました。「分け合う」「支え合う」経験は、里山でのサバイバルもへっちゃらです。子供たちは里山で遊び、保全活動をしなが自然から学び、新しい自立の道を見せてくれることでしょう。そこに関わる大人も共に学び、自らの復興を遂げたいと。被災者の自立を助立こそ復興への一歩だと思えます。

その一例を紹介しまかも振り分け、毎日学習会が午後六時〜七時四十分に行われました。その後、避難所と共に日々を過ごした子供たちは、避難所時代から始めた月一回の里山体験で元気と安心を取り戻しました。写真。その里山のフィールドで行う「かじか村」子ども王国プロジェクト

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組み「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

「海が見える、すごく高いよ」「みんなで木を植えれば将来はここが森になるかな」

十二月二十一日土曜日朝七時、宮城県亘理町大畑浜野球場付近で五機の熱気球が空高く舞い上がりました。写真。三百人ほどの親子連れは、数人ずつに分かれて気球の上から津波で流された地区を眺め、いろんな思いを巡らせたことでしょう。美しかった昔の松林やイチゴの実った畑の風景など…。でも、これからの亘理に必要なのは、過去の思い出ばかりではなく希望の持てる未来のはず。

「亘理町のために何か

## 東北復興日記

20



民の方に、このプロジェクトのことを知ってほしい、復興地で頑張っている人たちと「市民主体の震災復興」について語り合いたい、そんな思いが

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。



クレアン社長  
園田綾子さん

## 空から町づくり探る

したい「沿岸部を人が集もバラバラな人たちが、場所として復興させた二〇一二年六月から九月に、そう強く願う約五十人、の町の人が発起人となってできた「わたり」

に住民が主体で行うというまちづくり案の基本構想書(グラントデザイン)を策定して、九月に亘理町長に提出しました。多様な樹種の苗木づくり体験には企業関係者も参加しています。沿岸部の農地再生を目指した新規農業法人設立プロジェクトなどもスタートしました。ひとりでも多くの町民の方に、このプロジェクトのことを知ってほしい、復興地で頑張っている人たちと「市民主体の震災復興」について語り合いたい、そんな思いが

鳥の海以南の沿岸部約四の復興を防潮林中心として、九月に亘理町長に提出しました。多様な樹種の苗木づくり体験には企業関係者も参加しています。沿岸部の農地再生を目指した新規農業法人設立プロジェクトなどもスタートしました。ひとりでも多くの町民の方に、このプロジェクトのことを知ってほしい、復興地で頑張っている人たちと「市民主体の震災復興」について語り合いたい、そんな思いが

結集して気球フェスティバルが実現しました。資金もないし、ノウハウもない…。一度はあきらめたイベントでしたが、熱気球運営機構の町田耕造さんはじめ多くの方々が、発起人の松島宏佑さんや加藤登さんに共感してくれました。もちろん私たちJKSKも応援団の一員です。未来の森と町づくりへのビジョンは確実に広がっています。

東日本大震災という、すさまじい自然からの挑戦を体験した時、「これは東北の問題ではない、日本全国の問題を發揮・結集して対峙しなければならぬ問題である。男性に任せるのではなく、むしろ女性が牽引力になつていこう」と考えました。同じ問題意識をもった志の高い女性たちと一緒に始めたのが「JKSK 結集プロジェクト」です。

私が理事長を務めるNPO法人「女子教育奨励会(JKSK)」に参加している首都圏の女性エキスパートたちと、被災地を支える地元的女性た

## 東北復興日記

21



だが、これまで半年に一度、車座で東北の将来について語り合ってきた。ちが、これまで半年に一度、車座で東北の将来について語り合ってきた。ちが、これまで半年に一度、車座で東北の将来について語り合ってきた。ちが、これまで半年に一度、車座で東北の将来について語り合ってきた。



NPO法人「女子教育奨励会」理事長 木全ミツさん

## 女性たちの提案を形に

ちが、これまで半年に一度、車座で東北の将来について語り合ってきた。

宮城県亘理町では防潮林の再生に取り組み「わたるグリーンベルトプロジェクト」写真。そこで出た具

の有機栽培が始まりました。今年の六月にはTシャツとして販売を予定しています。

体的な提案を実現、成就していくためにいくつも支援事業が始まりました。一クシヨップを開催して

「かじか村」も王国プロジェクト」。津波被害を受けた子どもたちの意見を生かし、石巻高校の避難所で共に暮らした百人の仲間が核になって進めています。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結集プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

福島県南相馬は雪がちらつきことなく新しい年を迎えました。昨年よりも多い神社への初詣客を見て「ほっ」とした一年の始まりでした。南相馬は地震、津波そして原発事故により、その名が多くの方に知られました。約七万人いた人口は一時的に一万人台にまで減り、私自身も事故直後は「屋内退避」の意味もわからず西へ西へと避難しました。「屋内退避」が「緊急時避難準備区域」に変わり、人々は少しずつ戻ってきました。現在は四万人を超えるといわれています。

私には四月に小学校へ

## 東北復興日記

22



「逃げ出したい」と思いますが、故郷からではなくこの連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。



花と希望を育てる  
会代表  
高村美春さん

## 全て受け入れ「幸せ」を

入る子供がおります。本 少なくとも「放射能の脅威」と向き合わなければ生きてはいけません。検査も取り入れられませんが、まだ原発にもしものば生きているかもしれません。最近「ND(不検出)」の測定結果の出ている地元産の野菜を食べ、水道水を出せずにいます。写真。

学校の検診にはホールボディカウンターによる検査も取り入れられませんが、それでも屋外の放射線量はそれなりの高さです。それから、外部被ばくを常態に気にかけています。しかし、本当のつらさ考えていきたい。事故は、まだ収まらぬ原発事故起きたことを悔やみ恨む故の処理、賠償金等により、事故後にいただいたコミュニケーションの分たたくさんの「ご縁」に断、原発をめぐる賛否両論、将来の子供たちの健康問題、そして故郷を「汚染地帯」と呼ぶ人々の無理解などです。正直「逃げ出したい」と思いますが、故郷からではなくこの連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

の難解な問題からです。もう三月十一日前には戻れないのです。苦しくても朝は来ると避難生活で知りました。もう死ぬかもしれないと思ったあの日です。夜は明けました。それならば全てを受け入れ、日々の楽しみを見つけて「幸せ」とは何かに

「私も大変だけど、私よりも幼い子どもたちはもっと大変。保母さんになるという夢をかなえたい。親を失ったから短大に行けるかわからないけど、復興のために自分にできることをしたい」

震災後、はじめて被災地に入ったときに宮城県石巻市で出会った女子高生が私に語った言葉です。自分もつらいはずなのに、避難所で子どもたちの世話をする彼女と話して感じたのは、被災した子どもたちは日常を失ったからこそ日常のありがたみがわかる、ということでした。

多くのものを失った子

## 東北復興日記

23



NPO法人カタリバ  
代表理事  
今村久美さん

### 日常失った子どもも支え

子どもたちの中から、十年に、同県女川町に「女川 後に日本を支えるイノベ 向学館」を、十二月には「ター(革新者)が生ま 岩手県大槌町に「大槌臨 津波で家 放課後学校「コラボ や塾を流された子どもた スクール」をつくりま ちに学習指導と心のケア した。二〇一二年七月 を行っています」写真。

去年三月、生徒たちが卒業式で「震災で多くの人が関わって、自分が支援する側に回りたいと思うようになった」と言っていました。大きな希望です。地域の将来を担う人材として育

「もっと学びたい。世の中わからないことを知るために大学に行きたい」という子どももおり、日常的な居場所での出会いの機会をつく

る意義を実感しました。前向きに頑張っている子どもたちの姿はとても頼もしいですが、ふとした瞬間、ポキンと折れそうなるさも感じます。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

いわきオーガニックコットンプロジェクトは、一年目が終了間近です。プロジェクト開始を決意したのが一年前。市内十五力所、一・五畝で始まった栽培。五月の種まき、夏の草取りと水やり、十月からは綿の収穫と続いてきました。

先月収穫したコットンを専門機関でベクレルチエックを行いました。そして、全栽培地の綿がND(不検出)との結果が届きました。移行率が低い作物とされていますが、あらためてNDとの結果を得られたことに、一同胸をなでおろしました。そして、首都圏からの

## 東北復興日記

24



びほどには地中深く根を張っておらず、女性の力でもたやすく抜けておりました。ボランティアは延べた。畑の株は見る見るとで千人を超えました。本日に感謝しています。コットンの株は枝の伸た。畑に、春までゆっく

り休んで次の栽培に力を貸してほしいと、心の中からお願ひしました。収穫されたコットンを二月中旬にはドイツのニュルンベルクで開かれる「ピオファ」というオを渡していきます。

私たちの手元に届くのは六月。種をまいてから製品になるまでに一年以上かかるのですね。農業から繊維産業へのパトントンチです。希望のパトントン

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組み「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。



法人 NPO 理事長  
サ・ピフル 吉田恵美子さん

## 来月、福島県の綿を世界へ

に感謝しています。本日に感謝しています。コットンの株は枝の伸た。畑に、春までゆっく

り休んで次の栽培に力を貸してほしいと、心の中からお願ひしました。収穫されたコットンを二月中旬にはドイツのニュルンベルクで開かれる「ピオファ」というオを渡していきます。

私たちの手元に届くのは六月。種をまいてから製品になるまでに一年以上かかるのですね。農業から繊維産業へのパトントンチです。希望のパトントン

「南相馬復興大学」という人材育成プロジェクトが昨年十月から始まりました。南相馬の復興を自らの手でやろう、という市民が数十人参加し、毎月のように企画を練るワークショップを重ねています。写真。

私も講師の一員として参加していますが、初めて南相馬を訪れた時のショックは鮮明です。人けの無い町、二層ぐらいのセイタカアワダチソウが一面に生い茂っている農地。まさに荒れ地が延々と続いています。春風にそよぐ青々とした水田も、トンボも、黄金の稲穂もありません。四季折々の農村の景観が消失し

認定NPO法人  
JKSK理事  
大和田順子さん



## 南相馬支える人材育成

て二年が過ぎようとして  
います。電車では行けな  
い南相馬です。南相馬か  
ら福島への帰路は飯館村  
を通りますが、自動販売  
機以外に村にとる明か  
りはありません。

復興大学では地域住  
民、農家、事業者、地域  
発、地域固有の文化を活  
かして企画を検討してい  
ます。毎回首都圏からの  
参加者もあります。農業

・漁業の復興、特産品開  
発、地域固有の文化を活  
かしたツアー、そして再  
生可能エネルギーと四つ  
のテーマで事業計画を企  
画しています。

三月五日に東京で「南  
相馬復興大学」の成果報  
告交流会が開かれます。

25

## 東北復興日記



元の女性を中心となり、  
庭に植えられている多田  
錦という小さなユズを原  
料とした甘露煮やそれを  
活用したスイーツ、飲み  
物などを開発中です。ツ  
アーは南相馬の被災の現  
状を見、野馬追をはじめ  
とする地域固有の文化を  
知り、共に復興を考えて  
いただくようなスタディ  
ーツアーを企画中です。

この連載は、東京の認  
定NPO法人「女子教育  
奨励会(JKSK)」  
と、被災地の女性たちが  
協力して復興に取り組む  
「結結プロジェクト」の  
協力を得て、掲載してい  
ます。

今年も三月八日から「3・11未来へつなぐパトーン」という名の純米生原酒の出荷を予定しています。蔵元の全売上金がこれからの十九年間「ハタチ基金」に寄付されます。蔵のある宮城県大崎市では、ラムサール条約湿地の蘆粟沼と周辺の田んぼで、冬に水を張る農法「ふゆみずたんぼ」による米づくりが行われています。写真。豊かな自然を守るうとする農業者の熱い思いが込められた、自然にも人にもやさしいこのお米を原料米にして今年のパトーン酒は醸されました。

生産者である斎藤肇さん

## 東北復興日記

26

蔵  
マーケティング室長  
山田好恵さん



## 安心安全 お酒で味わって

んんんはふゆみずたんぼ 被害を受け、検査済みでの未来を担う農業者の「安全が証明された米である人です。震災以降、福島にもかかわらず、個人原産の放射能汚染の風評のお客さんの相次ぐキャ

ンセルに苦悩してました。未来の農業を背負って立つ若きパトーンランナーが真心こめて作った無農薬、無化学肥料栽培米「ふゆみずたんぼ」のサツかみました。大崎の自然と共生した安心安全でおいしい味わいのお酒をサニシキです。

津波被害の大きかった石巻に暮らし、大崎で働く私にとって、沿岸部と内陸部が共同して自らが復興者になるという強い意志を持つ必要性を感じています。自助、自立なくして未来はつけれないと思うからです。

来週十三日からドイツのニュルンベルクで開催

される世界最大のオーガニック見本市「BioFach」にジャパンパビリオンができ、一ノ蔵も初めて出展します。「ふゆみずたんぼ」米で醸した「特別純米酒一ノ蔵」を世界に広めるチャンスです。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結ぶプロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

以前、この欄で宮城県石巻市の「プチ市民」を紹介しました。石巻に「ちよこっと＝プチ」でも関心を持ってくださる方にプチ市民になっていただき、復興に向けて歩んでいこうという発想です。その後準備が進み、二月末に石巻を応援していただける方が登録できるHP（ホームページ）が開設されることになりました。

ただ名称は当初の「プチ市民」ではなく、「[chicot.com](http://chicot.com)」(まきいむじん)となりました。写真。理由は、地元の方から「ちよこっとだけではなく、もっと深く関われ



石巻サポート  
渉外広報  
藤間千尋さん

## 東北復興日記

27

## 巻き込まれる人 歓迎

る人も含めて表せる言葉「度で関われる内容を提供がよい」という発言が「あしよ」と、活動の幅を「た」がききかけで「広げることになったので」。「石巻へどれくらい

関わるかは相手に任せ、こちらは、いろいろな深み、巻き込まれた人は、

また誰かを巻き込もう」というコンセプトから「[chicot.com](http://chicot.com)」という造語ができました。有名なイラストレーターのご協力を得て、キャラクターも作りました。お披露目はHP上となります。

「[chicot.com](http://chicot.com)」の最初の大きな活動は、石巻を支援してくださった方々に市民から三月九日に「サンキューレター」を送ることです。ボランティア活動をしていた方、それ以外にもさまざまな形でお世話になった方たちに感謝の気持ち

を届けます。

住所が分かる方には直接、手紙を送ります。分からない方に対しては、HP上で市民からメッセージを登録できる方法を考えていますので、石巻に関わったことのある方、メッセージが書き込まれているかもしれません。まずは皆さん、巻き込まれてください！

巻き込まれる人歓迎!  
<http://is-maki.com/>

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。



もうすぐ東日本大震災から二年。私たち首都圏の女性たちでつくるNPO法人「女子教育奨励会(JKSK)」と、被災地の女性たちで復興を考える結核プロジェクト車座交流会も次回で五回目となります。

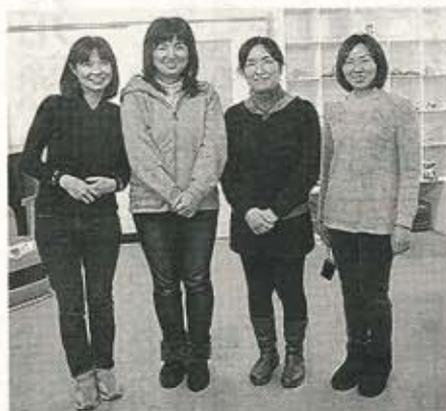
下見を兼ねて、気仙沼市と気仙沼大島に訪問してきました。写真。残念ながら、まだまだ復旧途上。一年半ぶりに訪れた気仙沼大島では、多くの企業ボランティアのおかげで砂浜のカレキはようやく撤去されましたが、「緑の真珠」とうたわれた癒やしの島の観光地としてのにぎわいを取り戻

クレアン社長  
園田綾子さん



# 東北復興日記

29



## 障害者とビジネス案

すまでは、かなり長い月がかりそうな状況でした。子育てを通じて、障害者も健常者も差別なく、共

そんな中で頑張っているのがNPO法人ネットワークオレンジ代表理事の小野寺美厚さん。障害

たちもお手伝いするようになつて、そこに福祉学校のボランティアが集まっています。津波で家屋も大きな被害を受けましたが、多くの方々の支援もあって頑張っ

て再起しました。そんな小野寺さんが力を入れてるのは、「東北マルシェ」。専門家を講師に招き、個々に自分が描くビジネスプランを磨き上げ、最終的には協働で商品の販売やサービスの提供を行います。車座交流会では、マル

シエのメンバー七人の方や気仙沼大島在住の女性リーダーのお話をうかがい、復興につながるアクションを一緒に検討します。大島には、ツバキを復興のシンボルにと、素敵なピンク色のツバキ染めを中心にしたコミュニティづくりに取り組んでいる方々もいます。次の車座は四月十二日(金)十三日(土)。JKSKのホームページで詳しく紹介しています。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。